

戯画化されるニーチェ

——「滑稽」と「諷刺」の模倣

清松 大

はじめに

一九〇一（明治三四）年八月、高山樗牛が『太陽』に発表した「美的生活を論ず」が広く文壇の耳目を集め、ニーチェ思想をめぐる大きな論争を巻き起こしたことはよく知られている。人生最大の幸福は「人性本然の要求」としての「本能の満足」すなわち「性慾の満足」にあるとした樗牛の主張は、批判的な言説を中心として大きな反響を呼ぶことになる。樗牛はすでに「文明批評家としての文学者（本邦文壇の側面評）」（『太陽』一九〇一年一月）でニーチェを取りあげていたが、文壇を熱狂的なニーチェ論議へ駆り立てたのは、

むしろニーチェへの言及のない美的生活論であった。

このことは、当時「ニーチェ通の第一人者と目されていた」登張竹風が「樗牛の主張はニーチェ思想に基づくものであると解説したこと」^①に大きな要因がある。竹風は「美的生活論とニーチェ」（『帝國文学』一九〇一年九月）において、美的生活論は「明かにニーチェの説にその根拠を有す」、「高山君の美的生活論を解せむと思はむ者は、またニーチェの個人主義を解せざるべからず」などと述べ、樗牛の「本能主義」をニーチェの個人主義思想と結びつけている。もつとも、重松泰雄が美的生活論の成立をニーチェ思想とは全く異なる視角から跡づけて以降、そもそも竹風の解説自体が樗牛の論旨を誤解した我田引水の論理であったことが繰り返し指摘されてきた。

とはいえ、前述のように樗牛自身がニーチェに接近していた時期に重なっていたこともあり、結果として美的生活論は、樗牛本人の真意とは離れたところでニーチェ思想との強固な関連性を付与されながら流布していくことになる。

右のような議論の歪曲は、竹風の例に端的に表れているように、美的生活論やニーチェ思想をめぐる議論が文学者や評論家たち各人の価値観や主張を投影する媒体としても機能していたことを意味してもいよう。ジェニファー・ラトナー¹¹ローゼンハーゲンは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのアメリカにおけるニーチェ受容史を、「ニーチェの決然とした挑戦を前にして、それに抵抗したり思索をめぐらすことによつて、アメリカの読者が自己についてまた同時代のアメリカについて、自分の価値観を形成してゆく歴史」と意味づけている。本稿もまた（必ずしも直接的なニーチェ著作の読書様態を扱うものではないにせよ）、ニーチェ受容史の再検討を通じ、従来とは異なる角度から明治期日本の文学者や文学青年たちの営為を照射しようとするものである。

特に高山樗牛については、明治のスター論客として青年層から敬慕された対象として語られることが多かった。⁵しかし、ここではむしろ、『文庫』や『新声』といった青年雑誌と樗牛との間に明確な緊張関係があったことに着目したい。そのことによつて、当時の文学空間における高山樗牛という存在の位置づけや、「青年」たちと

の関係性についても、従来の認識とは異なる側面が見えてくるはずである。まずはその糸口として、坪内逍遙に端を発する戯画的なニーチェ像の形成と流布に注目し、そこに引き起こされた論争の意義について考察していきたい。

一 「美的生活」論争から「馬骨人言」論争へ

まずは、この時期のニーチェ流行および美的生活論をめぐる論争の性質を確認しておく。美的生活論に対する多くの反応が様々な媒体で観測されることは、すでに笹淵友一や修斌らの調査によつて明らかになっており、大町桂月や樋口龍峽ら東京帝国大学出身者からも批判の声が上がったが、その中でも「最も執拗な批判を展開したのが、早稲田派の文学者たちであった」。⁷そこには、いち早く「美的生活とは何ぞや」を『読売新聞』（一九〇一年八月一九・二六日）に発表し、その後も再三にわたつて美的生活論を批判した長谷川天⁸溪を筆頭として、後藤宙外、中島孤島¹⁰といった論者が名を連ねる。

そして、早稲田派による攻撃の中でもひときわ異彩を放つのは、「馬骨人言」（『読売新聞』一九〇一年一月二日～一月七日、掲載当時は「×××」と署名）と題された坪内逍遙の批評である。同記事は、「何事も流行向の事さ。名からして粘^ねばりとニイツチェく」と言はぬと、此のせつの文壇では幅が利かぬげな。自分はニイツ

チェさま信仰でなければ、独逸語も知らぬが、英吉利人の通弁と同国製の蓄音機で、ほんの一二度、知りあひのやうなものになつたら、ちいとばかり魚まじりの猿真似を申さう」（一〇月一二日）といった論調で、皮肉とユーモアたっぷり、ニーチェの思想やその「信徒」たちを痛罵していく。さらに連載四回目（一九〇一年一〇月一五日）では、「ニイツチェ大師」という見出しで次のように述べられている。

一 ニイツチェの信徒もいろいろだ、本山大陸の阿羅漢連をはじめに、英吉利、亜米利加、乃至東西南北の殖民地、ずつと昇つてそんじよそこの声聞縁覚又の名はニイツチェは、いから、護謨はいからの執ればあれど、皆一網にひきくめて、南無ありがたい御法門の縁起大略、あらゝく代言したら、かうもあらうか。

一 帰命頂礼、こちらのニイツチェ大師は滔々たる全歐羅巴の悪時代精神に反発し、憤激し、竟に憤然決起して大胆な新見を唱破せられた豪邁卓落の大天才、不世出の大批評家であらつしやりまするぞよ。

このように、仰々しい仏教用語を多用しながら、ニーチェの思想やその「信徒」たちを嘲笑するのが「馬骨人言」の語法であつた。

また逍遙は、ニーチェが直面した一九世紀ヨーロッパの「悪時代精神」を「科学と歴史」「平等主義、禁欲主義、常識主義」「国家主義と服従主義」の三点に切り分け、それらを攻撃することを「ニイツチェ宗の大綱」。「ニイツチェイズムの破壊的方面即破邪門」（二〇月一六日）と位置づける。しかし逍遙は、「要するに此の大師さま、おのが手前を見るほどの目はあれど、後を見かへる眼はなく、客観的事変の諸の歴史、政治史、宗教史、実業史、社会進化史などが目に見えぬと同時に、主観的思想の変遷、哲学史、倫理史、文芸史なども皆目見えぬ」（二〇月一九日）とニーチェによる文明批評を酷評し、ニーチェをまつりあげる人々に対しても「畢竟は俊才たちの思ひつき、ニイツチェ坊の楯蔭で勝手に大気焔を吐かうがためだ。若い衆が発起の臨時祭と同格で、飲みたさ、踊りたさが主で、知らぬが仏の神さまはほんのダシ」（一月七日）と鋭い舌鋒を向ける。こうした戯作的な文体や、「読者に滑稽感をもたらず」「大袈裟な物言い」は、明治初期以来の『読売新聞』をはじめとする「小新聞に特徴的な書き方」を踏襲するものでもあつたであろうか。そして連載の最終回では「シャギリ」として狂言めいた形式のもとに幕が引かれる。

これに対して樗牛は、同年一月の『太陽』『文芸時評』欄で「ニイツチェの批難者」と題し、「何人にも解し得らるゝ事だけは書いて居るが、超人や、転生などの事になると、流石に俗学者の知解に

入り難いと見えて一言も述べて居らぬ。こんな手際でニイチエを批評し得らるものならば、世に批評ほど容易なものはあるまいよ」と反駁した。竹風もまた「馬骨人言を難ず」（『帝国文学』一九〇一年一二月）において、「馬骨人言の如き批評を以て識見高邁なりと賞する吾文壇は、未だニイチエを知らず、ニイチエを解せざるなり」と不快感をあらわにしている。一方の逍遙も「帝国文学記者に与へて再びニイチエを論ずるの書」を『読売新聞』に連載（二月一八〜二二日）して竹風に応酬、さらに翌年二月の竹風「馬骨先生に答ふ」（『帝国文学』）へと論戦は続いていくことになる。

このような論争が繰り広げられる一方で、逍遙がつくりだしたニイチエ戯画は、いつしか彼自身の手を離れて独自の展開をみせていく。杉田弘子は、「逍遙の激しいニイチエ批判が、『読売新聞』という大商業新聞に一ヶ月近くも面白おかしくほとんど連日掲載されたことは、ニイチエの名を一躍世間一般に浸透させる効果があっただろう」と推測するが、実際に同時期の新聞や雑誌をみれば、その反響の大きさがわかる。『太陽』「海内彙報」（一九〇一年一月）中、「文学美術」の項には、ニイチエに「私淑」する樗牛や竹風に対し「ニーツエを冷かに見て、其矛盾其真相を發きて、その蔓延を防がむとするは、読売紙上の馬骨人言なり、其文諧諷と理論とに富み、読んで実に痛快と叫ばざるを得ず」と記されている。また同月の『新声』「文芸小観」欄も、「今日快心の文字、他に少からざらむ、

而かも馬骨人言の痛快淋漓として他の頑冥者流を警醒するに若くものなきなり」と、『太陽』と同じく「馬骨人言」を「痛快」と評している。さらに同月の『中央公論』に掲載された、秋風子「落葉片々」も、「読売」紙上掲載の「馬骨人言」、識見高邁、学殖豊富、真個近時得易からざるの大文字」と絶賛したうえで「ニキツチエの祖述者、之れに拠つて幟を文壇に樹つるや、惶惶走せて門に赴くものあり。未だその説の是非を究めずして、忽ち雷同附和す、文壇の軽浮まことに以て慨するに足る」と逍遙の意見に同調している。

また一方で注目したのは、「馬骨人言」の語り口を模倣するかのような戯作的言説である。同じく『中央公論』所載の「文壇屠蘇機嫌」（無署名、一九〇二年一月）の一節を引く。

をいく、君は山伏のなりをして何処へ行く。青琴寺の古羅漢へ参詣しやうと思つて、して君はどちらへ。僕か僕は、ニイチエ大師へお詣りをしやうと思ふが、方角が知れないので困つて居る所さ。ニイチエなら直ぐこの先さ、併しあれは大師ではない、癡狂病院の親方だよ。さうか、それちや有難味がなくなつたが、併し君はどふしてそれを知つて居る。何、この麓で文壇地理案内といふのを見たから。

このように、「ニイチエ大師」という言葉を用いて文壇の流行を

戯画化する特徴的な語り口からは、「馬骨人言」の影響がうかがわれる。

ここで『中央公論』というメディアの性質を確認しておこう。周知のように、『中央公論』は当初『反省会雑誌』という名で一八八七（明治二〇）年に創刊された仏教系の禁酒会雑誌であった。浄土真宗西本願寺派の学生有志が起こした同誌は、永嶺重敏⁴¹によれば明治二〇年代中頃から「次第に仏教雑誌・宗教雑誌としての性格を強めてい」き、一八九三（明治二六）年には『反省雑誌』と改題し一八九六（明治二九）年には京都から東京へ進出、一八九九（明治三二）年に『中央公論』と名を改めた。ニーチェ論争の渦中、右のような記事が掲載された一九〇一、二年当時は、「小粒な仏教主義の雑誌」（永嶺）にすぎなかつた同誌で、「ニイツチェ宗」「ニイツチェ大師」などといった宗教的表現を用い、仏教用語を多用する「馬骨人言」の文体が模倣されたことは、さほど異様なことではないようにも見える。

とはいえ、この時期の『中央公論』は、「宗教」欄のみならず「公論」、「海外新潮」、「評論」など多彩な誌面作りを展開しており、林田春潮による文学関連の記事や、時折は小説も掲載していた。前出の永嶺によれば、この時期の同誌の主たる読者層は「文学志向の学生青年層」であり、雑誌『文庫』の記事「地方の読書界」（一八九九年八月）によれば、文学好きの高等学校生徒や大学生の多

くは『帝国文学』や『早稲田文学』を読んでいたが、他に『中央公論』を読んでいるものも少なからずいたという。そして、「馬骨人言」の影響を感じさせる戯画的ニーチェ像の模倣は、『中央公論』と同じく文学志向の青年層に支持されていた『文庫』や『新声』といった雑誌において、とりわけ多く観測される現象でもある。以下に、その様相をまとめていくこととする。

二 「馬骨人言」から青年雑誌へ

まずは『文庫』からみていきたい。八面坊「片言」（一九〇二年一月）には、「高山樗牛⁴²が、いつかの『太陽』で女子大に装ふ可し、女学生の髪、何ぞ蓬々たるやつて様なことを公言したが、何のモルモン宗ぢやあるまいし、女一人に男一人の世の中だ、美しいとて、飾るべきは唯一人の為め、□衆男児に媚を呈して、夫れで始めて妻に娶らるゝ様ならば、天下の婦女子は、取も直さず、芸妓である娼妓である、ニツエチズムも大概にせぬと、風俗壊乱として引縛るぞ」（□は一字分空白）とある。ここからは、もはや樗牛のあらゆる発言が、ニーチェイズムという先入観を避けて通れなくなっていることがみてとれる。

また、翌月の「諷叢」欄には「当世狂言尽 新宗論」と題する無署名記事がある。少々長くなるが、その一部を以下に引く。

△「こなたは、何処より何方へお通りやるぞ。」

○「これは早稲田辺に住居する坊様でおじやるが、鎌倉へ参る道中でござる。」

△「愚僧も鎌倉へ参るものじや、さらば御一所に参らう。」

○「これはよい道連れじや、してお僧は何処の和尚様でござりまするな。」

△「愚僧は隠れもない本能宗の六和尚でござる。」

○「左様でござるか、さらば赤門の和尚殿でござるか。」

△「なかく。」

○「なんと和尚様、かく連れ立つ道々も、互ひに法談の致いたら、仕へ奉る、仏の為にな為るでござらう。(中略)」

△「さらばこの方から始めよう、よつくお聞きやれ、そもく本能宗の御本尊は、舶来の秘仏、「ないちえ」尊者の、らいん河の辺りに説かせられた有難い法門じや尊者其時の御誓いには、此世ほど有難い者はない、何なりとも、したい事は此娑婆でなくては埒が明かぬ、世間の人の云ふ事は、みな人々の勝手から出来たことじや、その勝手の世じやによつて、己が勝手にせいであるものか、何んにも思ふ儘の事をするのをば、本能満足といふて宗門勘甚勘文南無妙あーめんとは申す(中略)」

○「汚らはしやく、なんのそれが有難いことであらう、こなた

たの法談説いてお聞せ申さう(中略)其方の宗門の承はつた以上は、たゞいま之を破つて見せう。(中略)

△「さりとは底の見え透く玻璃の様な法談じや、飲まぬ水の冷めたい味はわからぬ、独逸の言語も分らぬ癖に、「ないちえ」尊者の有難いことが腑に入るものか、片腹痛い事でおりにやる。」

○「これはしたり和尚殿、和僧如きが少々位蟹文字を読んだとて、何んの深い事が了らうぞ。」

△「いやく了らぬ事はなく、ずんと深く、井筒の中へ石を落とすよりも直ぐに了る、これを天才と云ふわいはい。」

○「天才といふは氣違ひのことじや、其方ごとき学問のない天才をば、疵入天才と云て、世間のもてあつかい者じや。」

△「そなたの様な馬の骨が何にを知るものぞ。」

○「馬の骨じやとて、人の如くものを言ふぞよ。」

「本能宗」の「赤門の和尚」とは樗牛をさすもの(あるいは『帝国文学』で樗牛の擁護を行つていた竹風をも含むか)とみてよいだろう。和尚は、ドイツ語も読めないくせに「ないちえ」尊者」の有難みなどわかるものかと反駁し、「そなたの様な馬の骨が何にを知るものぞ」と吐き捨てるが、それに対する「馬の骨じやとて、人の如くものを言ふぞよ」という言葉によつて「早稲田辺に住居する坊様」

が逍遙をさしていることが明らかとなる。ここでは、「馬骨人言」を源流とする戯作的なニーチェ関連言説の系譜を引きながらも、いわば「馬骨人言」それ自体を対象化して組みこんだ戯画化がなされているといえる。そして、これは明らかに狂言の「宗論」をふまえている。「宗論」は、それぞれ身延山と善光寺への参詣の途上にある法華宗の僧侶と浄土宗の僧侶が道連れとなり、互いの宗派の優劣を競って論争を行うという筋書きである。いわば、ニーチェイズムの流行を通俗的な仏教用語や観念にあてはめながら戯画化するという「馬骨人言」の方法が踏襲されながら、なおかつ狂言という芸能の形式を借りた「滑稽」化がなされているのである。

次に、『文庫』と同じく青年投書雑誌としての側面をもつ『新声』をみていきたい。同誌の「文芸小観」欄が「馬骨人言」を賞賛したことは前述のとおりだが、ここでは「甘言苦語」と題された、文壇・論壇時評を中心とする雑報欄をみてみたい。一九〇一年一月の同欄で「阿羅漢」と名乗る記者は、「近頃滑稽なるはニーチェイズムの流行」としたうえで、「一体我国の人士は猿の口真似をやるの外、何ものをも有して居ない無能力の学者が多いのだ、ニツチエズムを吹聴して廻る連中は、恐らく此手合ではあるまいか、かれ等は一体十九世紀の個人主義が如何に極端迄拡充せられて多くの弊害を生じたことを知らないのでもなからう（中略）過去十九世紀の惨劇を瞥見しながら、頻りとニーチェイズムを鼓吹するものは、畢竟す

るに自家の創見なきがために、他の禪を昇いて、得々と自己の学力を吹聴するの亜流であると云つても、恐らくは異論があるまい」と述べている。

ところが同一二月の同欄において「阿羅漢」の口調は一変する。「近頃ニツチエイズムの大流行によつて、ニツチエー先生大に恐縮の体だらうと思ふよ。ニツチエーを曲解して天才の紹介者は拙ござい！と怒鳴る先生もあればニツチエー一手販売は此処だよと澄ましこんでエヘンと髯を撫でる先生がある、も一つ親切にもこれを材料たに使つて、文学者となりすます先生がある、かう何処にも振りまはされては、流石の天才も恐縮してしまうだらう」。同一の記者による記事であつても、「馬骨人言」が世に出る前と後とは、その論調が大きく変容していることが如実に見てとれる。さらに、この月の同欄では「罵倒観音」と名乗る記者も、「何でも近頃は評判々々で売り出すので、『寝みだれ髪』でも『ニーツエ』でも『美的生活』でも穢多芝居よろしくで、楽屋から声ばかり掛けたので、明年も亦此通りかと思ふと情けない訳さ、ハテ、ツガもねえ」と、やはり「馬骨人言」の影響を感じさせる戯文調を用いている。さらなる類例として、黒田湖山を主筆として美育社から創刊され、巖谷小波の「木曜会」に集まっていた生田葵山や永井荷風、押川春浪らを中心として刊行されていた雑誌『饒舌』を挙げておきたい。同誌創刊号（一九〇二年二月）には、「くろすけ」（黒田湖山か）の署

名のもとに「運動甚句 ニーチェ主義」という記事が掲載されている。そこでは、「今宵忍ぶなら／ニーチェ全集持つて忍ばんぜ／モシモ、人がとがめたら、／本能主義ぢやと言つて／ぬけしやんせ／尤も、独逸語をチョトかじり／出てくりや、真から可愛い。／学士登張さんと博士高山さんは／ニーチェで名をうる」とうたわれる。甚句という江戸的な俗謡によってニーチェの喧伝を戯画的に描き出したヴァリエーションといえる。

また、同誌第二号（同三月）の「木曜会日記（二月）」をみると、「会にて朗読、批評を望みたるもの」の中に押川春浪の「色界ニイチエ」という作品が挙げられている。これは、のちの第五号（同六月）に掲載された「滑稽的死亡」という短編小説の原型と推定される。主人公の丸山は謹直かつ敬虔なクリスチャンであり、性的な遊蕩や酒、煙草などを卑しむ人物として造形されているが、物語の結末で、このような人物像は反転されることになる。「倒家三千軒、死人三万人」という大地震の起きた翌日、丸山は「誤解されたるニイチエ宗の本陣——とばかりでは分るまい、即ち大日本東京浅草区新吉原揚屋町辺のとんねる横町、倒れたるちよんく、格子の下」から発見され、語り手は「パラダイスに行く事疑ひ無し、蓋し先生宗教道德を説いて金を儲け、其金で女郎を買ひ、本能を満足せしめつゝ、現世を去つた、満足して死ねば幽霊になる氣遣も無し」と物語を締めくくる。地震によって崩れた吉原の町内から丸山の遺体が発

見されることで、謹厳と目されていた彼の本性が明らかになるというブラックユーモア的な筋書きだが、「誤解されたるニイチエ宗の本陣」や「本能を満足せしめつゝ、現世を去つた」といった言葉からして、この結末部分が美的生活論をふまえて書かれていることは明らかである。

このように、「馬骨人言」の出現以降、『新声』や『文庫』、『饒舌』といった青年雑誌では、ニーチェイズムの流行をモチーフとしながら、さらなる「滑稽」のヴァリエーションが創出されていた。このことは、樗牛というアイコンと同時代の「青年」との関係性をめぐる一般的な理解の図式を反転する契機をはらんでいよう。従来、樗牛という存在が青年たちにとつての敬慕の対象として位置づけられてきたことは本稿冒頭でもふれた通りである。しかし、ニーチェ論争の渦中において青年雑誌の論者たちは、樗牛という存在や「本能主義」という思想を容赦なく「滑稽」化し、時には、「滑稽」的なニーチェ像をつくりだした張本人たる逍遙をも組み込みながら、ニーチェ思想や美的生活論をめぐる論争そのものを戯画化していくのである。

こうした現象をとらえるには、当時の青年雑誌の位置とを確認しておく必要がある。関肇は「青年による青年のための投書雑誌」として『文庫』を位置づけ、同誌と重なる読者層を抱えながら競合していた雑誌として『新声』を挙げているが、関によれば、この時

期の文学青年たちは「既成文壇への徹底した批判者たることにみずからの役割を見出していった」¹⁵⁾。小島烏水「文壇に於ける「文庫」の位置」(『文庫』一九〇一年一月)では、「既成文壇において創作は硯友社が独占し、評論は赤門派が支配し、その両方面を兼備するものに早稲田派があるというように、いわゆる「文閥」が横行しているが、この風潮を打破し、「停滞沈澱の患ひ」をなくしていかなければならない」とする主張が示されている。

また、前述のように黒田湖山や生田葵山など、巖谷小波門下の木曜会会員を中心として創刊された『饒舌』については松田良一の考証¹⁷⁾があるが、松田によれば、一九〇〇(明治三三)年九月に会の主催者である小波が渡欧したことで「青年会員達は、いわば庇護者を失い木曜会そのものも崩壊の危機に瀕していた」。湖山や葵山は、かねてより紅葉門下生たちにライバル意識を持つており、文芸評論等で硯友社系作家への攻撃を行っていたため、「紅葉門の勢力圏の『新小説』へ作品を送つても掲載されず全く疎外されてしまった」。そこで会員たちは大学館の雑誌『活文壇』を復刊させ、葵山を主任とし「他の青年雑誌の戦略と同様に文閥打破を、西欧文学撰取を鮮明にし」ながら、そこに活路を見出そうとした。しかし『活文壇』は「同じ投書雑誌という性格を持つ『新声』や『文庫』の挾撃にあい」、一九〇一年一〇月をもって廃刊に追いこまれる。そこで再起をはかるべく創刊されたのが『饒舌』であった¹⁸⁾。

こうした青年雑誌の動向には樗牛も目を向けていた。『太陽』「文芸時評」欄(一九〇一年一〇月)において樗牛は、「少年文学雑誌の数、今日殆ど十を以て数ふ。新声と文庫とは其の尤なる者也。概ね是の種の雑誌、文の読むべきもの少く、事の記すべきもの稀なり。(中略)少年諸子の為に計る、是の如きは百の害ありて一の利無し」と、『新声』や『文庫』を名指しにしながら、青年雑誌に対する敵意を露わにしている。

それに対して『文庫』側も、翌月の「編輯局内観」において、「樗牛と申さるゝ人、『太陽』にて少年雑誌の悪弊を挙げ、(中略)本誌の名をこの中に算へたるは、寢惚加減の度が知れぬと申すものにて候」とし、「それよりもお手近の『太陽』や『帝国文学』でも読んで、いかにその『文の読むべきもの少く事の記すべきもの稀なる』にお気を注げられた方、危なげなかるべくや」と、樗牛の言葉をそっくりそのまま返しながら反撃を加えている。さらに同月の『新声』「文芸小観」欄も「無礼の言」として樗牛の発言を取りあげ、「漫りに自ら高うして他を蔑視せんよりは、まづ足下の座右に目を止めざるべからず」としている。このように、青年雑誌と樗牛との間には明確な敵対関係があった。

諧謔性を有しつつ諷刺的な調子で描き出されるカリカチュアは、右のような青年雑誌の性質を少なからず反映するものでもあっただろう。そこから浮かび上がってくるのは、樗牛というアイコンを敬

慕してやまない心酔者としての青年たちではなく、文壇の周縁に置かれながら、「文閥打破」というスローガンのもとに中央文壇・論壇への対抗意識を燃やす青年たちの姿である。

それにしても、既成文壇の中心的存在である樗牛を攻撃するため、ことさらに「滑稽」という武器が選ばれたのはなぜだろうか。その源流を探るべく、同時代の文学空間において「滑稽」という概念がどのように位置づけられていたかを追ってみたい。

三 「滑稽」と「諷刺」の効用

その糸口として、やはり『新声』誌上において「滑稽」的なニイチエ像の再生産を担っていた阪井久良伎の動向を追っていききたい。

『新声』一九〇一年一月の「弦月会の記」（署名・萍緑庵）には、「新声誌友懇話会」とされる「弦月会」が催されたことが記されているが、同号に掲載された久良伎の「弦月会大会に寄す」は「新聞の一口話」の形式をとりながら、「只来会者諸君が、アハハ、と大口をあいて、腹を捧^かへればソレで会の能事足れりで、コレでこそニイチエ大明神の本能主義にもかなうのである、ソレはソレ、コレはコレとしておいて何か、我が本能の「滑稽主義の鼓吹」とでも題してシヤベロウかと思ツたが、例のお談義に陥りそうであるから見合せて」などと語っている。「本能主義」という美的生活論の用

語を使い、ユーモラスな語り口で滑稽談に仕立てあげる久良伎の筆法は、「ニイチエ大明神」といった語彙からして、やはり「馬骨人言」との相似性を有している。

これと関連して興味深いのは、翌一九〇二（明治三五）年五月の『新声』に掲載された「珍派園遊会」（署名・珍派子）である。この園遊会では、主催者の久良伎自身による狂言がいくつか披露されたらしく、「ニツチエ大師の狂言などは時節柄面白かつた」と記者はいう。「ニツチエ大師の狂言」とは、久良伎が同月に文星社から刊行した『文壇笑魔経』所収の「ニイチエ坊大明神」と同一のものである。この狂言脚本は「ニイチエ主義信者」（以下、信者）をシテとして「ニイチエ坊大明神」（以下、大明神）、「信者の花嫁」（以下、花嫁）が登場する。「世の中に主義は様々有る中にも、此のニイチエ坊大明神が開かせられた、美的生活、本能満足の大主義に及ぶ者はござるまい、世の中にヤレ道徳ジャの宗教ジャの、倫理ジャの申^まいて、堅苦しい偽善の徒が多いのを憤られて、ニイチエ坊が反抗せられた気焰の宗旨は、洵に世に難有いお宗旨でござる」と語る信者は、「ニイチエ坊大明神のお社」に参り「美しい花嫁を授けて戴かう」と祈願する。すると信者は突然の眠気に襲われ、その夢に大明神が現れる。大明神は、「此頃東洋日本の御国に、身共の信徒がいかう殖えた」ために、「高山の樗牛、登張の竹風など申す信徒からの招き」を受けたと語る。信者が「どうぞ本能満足の御宗旨を

味はひます程な美人を妻にお授け下さい」というと、大明神はそれを聞き入れるが、その後、実際に信者の前に現れたのは「醜くい女」であった。信者は「苦々しいことでおりやる」と吐き捨てるが、女は「これはいかな事、ニイチエ坊様よりのお指図、妾はわがりよの妻と定められたもの、ニイチエもサンチエも離るゝことではおりない」といい、「ニイチエくニイチヤく」と唱えながら信者にまとわりつく、というところで幕が引かれる。

樗牛や竹風を「ニイチエ坊」の「信徒」と称し、ニイチエイズムを「本能満足の御宗旨」などと言い換えるこの狂言は、その語彙や戯画化の構造において「馬骨人言」ときわめて類似した枠組みを有している。逍遙がつくりだした「滑稽」なニーチェ像は、久良伎の「滑稽主義」にとつて至上の好材料であったといえるだろう。同時期の『読売新聞』紙上でも、読者投稿による「川柳、狂歌「へなぶり」、一口話など」¹⁹が盛んに掲載されており、その後、『読売新聞』記者であった田能村朴念仁の編による『へなぶり』と題された狂歌集の第一輯（一九〇五年六月）および第二輯（一九〇六年七月）が読売新聞社から刊行されている。「馬骨人言」と久良伎の活動の親和性は、『読売新聞』文化圏の一面面と、川柳作家として知られていた久良伎の「滑稽」的特質が呼応したことによりもたらされたものであっただろう。そして、久良伎が用いた「狂言」仕立ての表現形式は、「シヤギリ」として締めくくられる「馬骨人言」に通じる

とともに、前出の『中央公論』所載「文壇屠蘇機嫌」や、『文庫』所載の「当世狂言尽 新宗論」にも採用されていた形式であった。

前述のように「当世狂言尽 新宗論」は、狂言の「宗論」をパロディ化したものであった。幸田露伴は「我邦文学の滑稽の一面」〔『明星』一九〇三年二月、『帝国文学』一九〇四年一月「附録 帝国文学会第一回講演集」に収録、のち「滑稽談」と改題され一九二六年に至誠堂書店より刊行の『洗心広録』収録〕において、「我国滑稽の文学を云はんとせば、眼を狂言に注がざるを得ざるなり」と述べ、「宗論」を「真に滑稽の価値を有するもの」「無邪気にして趣味の存する」²⁰ものとしている。すなわち狂言とは同時代において、「滑稽」的な「趣味」の神髄に通ずる一形式として認識されていた側面を持つのである。

このような「滑稽」の価値を問う議論として想起されるのは、美的生活論争以前に、やはり樗牛と逍遙の間にたたかわされた「滑稽文学（の不在）」をめぐる論争である。この論争の経緯については浦和男が詳細に跡づけているが、一八九五（明治二八）年から一八九七（明治三〇）年にかけての『帝国文学』『雑報』欄には、無署名ながら樗牛と思われる記者が「滑稽」に関する記事を断続的に寄せ、「滑稽文学」やその作者の出現を待望する論を展開している。これに対し逍遙は、『早稲田文学』誌上で「今の滑稽作物を需欲する者、往々にして滑稽と諷刺とを混同し、（中略）妄に嘲諷の筆を

弄し、社会を諷する名の底に個人を譏笑する作の如きは、予は殆ど読むことを好まず」（「何故に滑稽作者は出でざるか」、一八九七年一月）などと述べ、「滑稽」の濫用を戒めた。浦によれば、この論争では「樗牛が「滑稽文学の不在」を真摯に歎いてたわけではなく、「文学における滑稽の不在」という問題にまで十分に煮詰めなかつたために、十分な結論も作品も出でこなかつた」が、「この「滑稽文学の不在」は、明治期を通じて論じられ、のちのちまで後を引くことになる」。

「馬骨人言」成立の背景においても「滑稽」への意識は見逃せない要素である。逍遙の『通俗倫理談』（富山房、一九〇三年二月）では、「馬骨人言」に序す」から「馬骨人言」本文との間に「匿名の動機を論ず」、「諷刺反語の是認せらるべき場合を論ず」、「嘲諷の是認せらるべき場合を論ず」という三種の短文が挿入されている。「滑稽と諷刺とを混同し」、「妄に嘲諷の筆を弄し、社会を諷する名の底に個人を譏笑する」（「何故に滑稽作者は出でざるか」）ことを戒めていた逍遙であつたから、「諷刺反語」や「嘲諷」の用い方に慎重になるのは当然のことであろう。

右に挙げた短文の末尾には、「以上三是認説のうち、諷刺、反語に関する分はニイチエが言論及び其れに類似の無責任の放論を嘲世、諷俗の正論なるが如く曲解するものありて、世間往々之れに惑はざれ、名を諷刺に借りて僻説妄談を縦にするもの日に多からんとする

傾向ありしが為に草したり」とある。そして「諷刺反語の是認せらるべき場合を論ず」では、「第一、言論の自由と思想の自由なき場合（専制時代など）」、「第二、礼儀上若しくは方便上、正面より説破する能はざる、若しくは説破することの妙ならざる時」、「第三、他をして正言するよりも鋭く感銘する所あらしめんため——これに多少悪意若しくは敵意の加はれるものと無邪気なる嘲弄との二種あり」という三通りの場合分けが行われている。「馬骨人言」をどの場合に分類するかは判断に迷うところだが、さしずめ第二と第三の場合にまたがるものといえようか。付け加えれば、青年雑誌に流布した「滑稽」なニイチエ思想の戯画は、第三の場合の「多少悪意若しくは敵意の加はれるものと無邪気なる嘲弄」という性質を含んでいよう。

このように逍遙は、分別を弁えない「嘲諷」に対しては一貫して慎重な姿勢を保つ一方で、こと「馬骨人言」の意義をめぐつては、「滑稽」、特に「諷刺」の効用について肯定的な見解を示している。ここには、いささか後付け的な自己弁護の感もないではないが、逍遙の定義するような、「他をして正言するよりも鋭く感銘する所あらしめん」という「諷刺」の効果は、前述のように同時代において「馬骨人言」を「痛快」とする声があがつたことに鑑みれば、確かに一定の効果を發揮したといえるだろう。かたや、かつて積極的に「滑稽」を鼓吹していた樗牛自身とその思想が、ほかならぬ逍遙に

よって「滑稽」化されてしまったことはいかにも皮肉である。

そして、同時期の「滑稽」をめぐる言説にも、「諷刺」に積極的な意義を見出しているところとするものが少なからずみられる。たとえば、緒方流水『文学管見』（民友社、一八九九年二月）には「滑稽と諷刺」と題された一条があるが、そこで緒方は「滑稽は忽ち諷刺の材料と成らん」とし、「諷刺は滑稽的にして諷刺的なるを上乗とす」と述べている。さらに緒方は別の「諷刺の時代」という条でも、「滑稽小説の呼声は、一時其絶頂に達して、今や全く下火と成り、それに代わって悲惨小説が「優等なる地位を占め居ること」に対して、「諷刺小説」出現への大きな期待を寄せている。²³⁾

また、博文館の『通俗百科全書』シリーズの第一八編として刊行された『通俗文章学』（宮川鉄次郎編、一九〇〇年八月）では、「文勢編」の内の一項目として「滑稽」の項が立てられている。そこでは「諷刺文」が「滑稽諧謔の間に辛然たる意味を含ませ、人を刺撃するもの」と定義され、この「諷刺文」こそが「滑稽文の最も高尚なるもの」であるとされている。そして、曾呂利新左衛門や太田南畝が例に挙げられながら、「大に時事を諷刺する」文章が、「よく人を警醒」するものであるとされる。「滑稽文」における「諷刺」の効用をきわめて高く評価した例といえるだろう。

「馬骨人言」の「諷刺」性は、右に示したような時代の要求にも、ある程度応えるものであったといえるのではないだろうか。逍遙か

ら久良伎へ、そして青年雑誌の誌面へと波及していったニーチェ像（あるいは美的生活論争）の戯画は、逍遙と樗牛の「滑稽文学」論争以降、明治三〇年代の文学空間に伏流していた「滑稽」への要求とも通底する部分があったはずである。

永井太郎によれば、「明治三〇・三一年以降は、滑稽小説は軽い読み物の名称となり、問題として取り上げられなくなる」といい、²⁴⁾ 羽鳥徹哉は、そのようなエア・ポケットを「笑いの喪失」と呼んだ。²⁵⁾ しかし、「滑稽小説」の失墜は、文学空間から「滑稽」への関心が跡形もなく消え去ってしまったことをただちに意味するものではなく、必ずしもない。明治三〇年代の小説空間から姿を消したかのように見えた「滑稽」への問いと実践は、ニーチェや美的生活論をめぐる文壇を風靡した論争の中に、確かに息づいていたのである。

おわりに

『新声』一九〇二年二月の「甘言苦語」欄において「黒眼児」を名乗る記者は、「趣味ある滑稽は確執衝突等とを調和して、彼我渾然として一体ならしむべき大能力を備へて居るものだ、故に社会が光栄ある進歩をなさうとするには滑稽がなくてはならぬ」と主張し、曾呂利新左衛門やサミュエル・ジョンソンを引き合いに出しながら、「滑稽の福音、滑稽の魔力は此の如く一世の大衝突を未然に防ぎ、

天下民心の擾乱を未萌に刈取る処の大々能力を有して居る」と述べる。そして、「滑稽博士の出現を渴望する」と同記事は結ばれる。

青年雑誌におけるニーチェ論争の戯画化を、ただちにこの記者がいう「確執衝突等とを調和して、彼我渾然として一体ならしむる」、「趣味ある滑稽」として評価できるかどうかは大いに疑問だろう。

しかし、「馬骨人言」という戯文の裏で、「滑稽」的「諷刺」的な手法によつて読者たちに「感銘」を与えることが企図されていたように、青年雑誌におけるニーチェ戯画や論争のカリカチュアに「滑稽」「諷刺」への意識を読みとることは十分に可能である。そして、そのような意識は、樗牛（中央文壇）と対立する青年雑誌の対抗意識と共鳴し、樗牛や逍遙らによつてたたかわされる論争それ自体を戯画化する契機にもなつていったのである。

これらの問題は、高山樗牛という偶像的存在と青年層との関係性をとらえなおす契機であると同時に、従来の文学史や論壇（争）史の枠組みにおいて見落とされてきた言説空間の側面を照らしたすものでもある。さらには、狂言などの芸能にも通ずる「滑稽」の概念、そして、その中でも「高尚」とされた「諷刺」への意識が、明治期の文学空間においていかなる位置を占めていたかという問題²⁶を究明していくための一視座としても、見過ごすことのできない現象であるはずだ。

注

(1) 杉田弘子『漱石の猫とニーチェ』、白水社、二〇一〇年二月、二四頁。

(2) 重松泰雄『樗牛の個人主義——「美的生活」論をめぐる——』、『国語国文』第二二巻第五号、一九五三年五月、「樗牛とニーチェ——「美的生活」論を中心として」、『文芸研究』第一三集、一九五三年六月。

(3) 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』、明治書院、一九五八年一月、二〇二頁、谷沢永一『文豪たちの大喧嘩——鷗外・逍遙・樗牛』、新潮社、二〇〇三年五月、二二五—二二九頁。なお笹淵は、後述の坪内逍遙「馬骨人言」への反論において樗牛自身が「美的生活論とニーチェとの関係を一応承認、少くとも黙認した」とし、のちに「自説とニーチェと無関係なことを強調した（明治—引用者注）三十五年当時とは態度が異なっている」ことを指摘している（前掲書、二〇八頁）。

(4) ジェニファア・ラトナー・ローゼンハーゲン『アメリカのニーチェ——ある偶像をめぐる物語』、岸正樹訳、法政大学出版局、二〇一九年一〇月、四二頁。

(5) たとえば林原純生「美的生活論、自然主義、私小説——ひとつの史的見取図の試み」、『日本文学』第二七巻第六号、一九七八年六月、八九頁）は、「美的生活を論ず」を契機とする「ニーチェ熱美的生活熱」は、高山樗牛の死後も論壇を超え、青年層を動かし「たとし、林正子『太陽』に読む明治日本のドイツ文明批評と自己探究——ドイツ関連記事と樗牛・嘲風の評論を視座として」（鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』所収、思文閣出版、二〇〇一年七月、四七〇頁、のち林正子『博文館「太陽」と近代日本文明論——ドイツ思想・文化の受容と展開』に収録、勉誠出版、二〇一七年五月）も「当時の青年の樗牛心酔」を指摘し、「自我の覚醒を体験し謳歌しつつあった青年知識人たちに圧倒的な影響を及ぼしたことは紛れもない事実」としている。また木村洋『文学熱の時代』（名古屋大学出版会、二〇一五年一月、一六〇—一六一頁）は、「美的生活を論ず」をはじ

めとする樗牛の評論群が契機となり、「かつて青年たちの渴仰の対象」であった徳富蘇峰から樗牛へと「青年の代表者の交代劇」が行なわれていくさまを跡づけている。

- (6) 笹淵、前掲書、二〇二二〇四頁、修斌「明治日本におけるエーナーチエ受容に関する考察」、『新潟史学』第四七号、二〇〇一年一〇月。
- (7) 長尾宗典『憧憬』の明治精神史——高山樗牛・姉崎嘲風の時代、ベリカン社、二〇一六年一〇月、二六一頁。
- (8) 「エーナーチエ主義と美的生活」、『読売新聞』一九〇一年一〇月二二・二八日、「無用の弁」、『太平洋』一九〇一年九月三日、「歳末文壇」(同一二月一六日)、「矛盾録」(同一一九〇二年二月一七日)、「新思潮とは何ぞや」、『太陽』一九〇二年三月。
- (9) 「無断案と煩瑣」、『大阪毎日新聞』一九〇一年九月一六日、「文壇雑俎」(同三〇日)、「最近の反動」、『新小説』一九〇一年一〇月。
- (10) 「文壇近時の風潮に就て」、『読売新聞』一九〇一年九月三〇日。
- (11) 「馬骨人言」は戯文調の文体が独特の存在感を放つ一方で、その論旨に関しては同時期の他の論者の批判的言説とも一定の類似性を有していた。たとえば樋口龍峽「八面鋒」(『新文芸』一九〇一年九月)はエーナーチエ流行を含めた同時代文壇の風潮を「神輿主義」と評し、学理や主義を奉ずるわけでもなく、単にその尻馬に乗り騒いでいることを批難する。また、同月の『早稲田学報』「人物月旦」(無署名)は、バイロニズム等を引き合いに出しながらエーナーチエの思想を時代思潮への「反動」と位置づけ、エーナーチエ思想の特殊性・新規性を否定する。「馬骨人言」でも、「放埒主義のバイロン主義」等に言及しながらエーナーチエ思想を「諸種の偏思潮の反動」「十九世紀の起頭に於けるあらゆるイズムスの反動」とする箇所(二〇月二〇日)があり、両者の内容は酷似している。
- (12) 山田俊治『大衆新聞がつくる明治の(日本)』、日本放送出版協会、二〇〇二年一〇月、二二六頁。

- (13) 杉田、前掲書、五〇―五二頁。
- (14) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』、日本エディタースクール出版部、一九九七年七月、一三五―一四四頁。
- (15) 関肇『新聞小説の時代——メディア・読者・メロドラマ』、新曜社、二〇〇七年二月、二七一・二七八頁。
- (16) 関、前掲書、二七九頁。
- (17) 松田良一『永井荷風——ミューズの使徒』、勉誠社、一九九五年二月、二〇六―二〇九頁。なお松田の記述はその多くを生田葵山の回想「永井荷風といふ男」(『文芸春秋』一九三五年一〇月)に負っている。
- (18) 黒田湖山と押川春浪は両者とも東京専門学校を卒業しており、その意味では早稲田派に属する存在とみることができ、関や松田の指摘する「文壇打破」という意識からすれば、彼らの言説は他の早稲田派文学者たちとは区別して考えるべきだろう。
- (19) 浦和男「明治期「讀賣新聞」と笑い」、『笑い学研究』第一八号、二〇一一年七月、三九頁。
- (20) 露伴が校訂した『狂言全集 上巻 狂言記』(博文館、一九〇三年六月)には「宗論」も収録されている。
- (21) 浦和男「滑稽の不在——明治文豪の論争」、『笑い学研究』第二〇号、二〇一三年八月。
- (22) 浦和男「滑稽の不在——明治文豪の論争」、前掲論文、九頁。
- (23) 永井太郎「明治三〇年の滑稽小説」(『福岡大学日本語日本文学』第二九号、二〇二〇年一月)は、「滑稽(小説)」が「一八九七年一〇月に「突然文壇の主要トピックスとなる」(同論文一八頁)ことを指摘し、そのような傾向を、日清戦後文壇で隆盛していた「悲慘小説・観念小説の深刻な悲劇性への対抗」(同三頁)として位置づけている。
- (24) 永井、前掲論文、二六頁。
- (25) 羽鳥徹哉「近代日本文学と笑い」試論、ハワード・S・ヒベット、長

谷川強編『江戸の笑い』所収、明治書院、一九八九年一月。

(26) なお、「諷刺」やユーモアはニーチェ自身の思想や著作においても重要な概念(タルモ・クンナス『笑うニーチェ』、杉田弘子訳、白水社、一九九八年一月)といえるが、それが本稿で取りあげた「戯画化」とどのように関わっているかという問題についてはさらなる考究の余地がある。

【付記】原則として引用は初出により、旧字は適宜新字に改め、特に必要と思われるものを除いてルビや傍点等は省いた。また、引用文中の「／」は改行を意味する。なお本稿は、日本近代文学会二〇一八年度秋季大会(於岩手県立大学)での口頭発表に基づく。貴重なご意見を下さった方々に感謝申し上げます。